

元荒川の生活誌（第一報）

— 文化景観論的アプローチ —

Ethnographic Consideration of MOTOARAKAWA River (First Report)

— About Culture and Landscape —

斎藤 修平*・岡本 紋弥**・佐藤 和平***
佐藤ひろみ****・中林みどり*****・八藤後忠夫*****

Shuhei SAITOU, Monya OKAMOTO, Wahei SATOU
Hiromi SATOU, Midori NAKABAYASHI, Tadao YATOUGO

キーワード：MOTOARAKAWA River, Life Story, Ethnography,
Theory of Cultural Landscape

要旨：文教大学越谷校舎正門前を流れる「元荒川」が学生や近隣住民にとってどのような存在であるのか、という素朴な疑問からその意味と意義を確認する目的で主に聞き取り調査を中心に検討した。得られた知見は以下のとおりである。1) 近隣住民にとって、現在の元荒川はそれほど意識化される存在ではないが、自然を守る市民団体の活動から、「自然保護・環境保全・景観重視」という視点で今後のあり方への具体的な課題が確認された。2) 学生にとってもそれは「大学の象徴」であり、アイデンティティ形成につながる側面を持つと判断された。つまり“記憶の中にあり”“背景化されつつある”元荒川とその近隣文化を、大学を含んだ地域の価値として再考する必要性が示唆された。

I 序文 問題の所在と設定

国内の小中学校が地域とともにあり、時に様々な行事や交流の中心的な役割を果たしてきたことはよく知られている。一方、大学は旧来その地域の象徴或いはある種の独立した異物として存在し続けてきたと言ってもよいだろう。しかし近年、大学も小中学校同様、地域と一体化した活動や交流が求められている。この傾向は、地域市民が様々な情報を専門機関である大学から選び取る機会を生み出すとともに、在籍する学生自体がその近隣住民の生活実態から学ぶという双方

* さいとう しゅうへい 客員研究員・埼玉県立大学非常勤
** おかもと もんや 客員研究員・新内語り継承者
*** さとう わへい 埼玉県立浦和西高等学校
**** さとう ひろみ 文教大学人間科学部
***** なかばやし みどり 文教大学教育学部
***** やとうご ただお 文教大学教育学部

向的な関係を創出する。今や大学は、そこに聳立する静的な存在ではなく、学びの移動体としての使命を負うと考えても過言ではなかろう。因みに本学・湘南校舎では大学と地域が交流しその地域の文化を学ぶという「茅ヶ崎学」を提唱し実践している（小林，2011）。

その意味から本稿は、大学と大学が位置する越谷市ならびに校舎の前に流れる「元荒川」に着目し、元荒川に関わる生活と文化が大学とどのように関連し、今後どのような地域的展開が求められるのかを検討することを目的としている。

よって本稿の構成を以下のように構成した。Ⅱ-1では、元荒川と近隣住民の暮らしを過去に遡って確認するため、住民を対象とした聴き取り調査をもとに概観する。Ⅱ-2では在学生を対象とする自記式簡易調査票の回答結果をまとめ学生にとって幼少時の川イメージと現在の元荒川に対する意識を単純比較する。Ⅱ-3では元荒川を中心に地域構造の変化を地誌学的に記述する。Ⅲでは大学と地域との有機的関係のあり方に関して、元荒川を軸に検討しその展望を試みる。副題を文化景観論的アプローチとした所以である。

Ⅱ 背景化される川 — 記憶の中の元荒川・そのエピソード

1 大学周辺における元荒川と住民の暮らし

この項では、「元荒川の半世紀」と題して昭和25年に分家として出津地区で暮らしをはじめた一人の語り手（大正7年生・男性）から伺い知ることが出来た元荒川を描述した。この語りの内容を一つの事例として、次回には話者を追加し、語りを秩序化し、伝承文化としての川の景観を提起したい。なお話者の語り部分は斜字体で示してある。

1) 昭和20年代の光景 — 畑地と土手（「野合」「堤根」等は旧地区名で現在の自治会名である）

野合が20戸、野中が17戸、堤根が45戸、中組が25戸、下手が30戸といった戸数だった。最近では、新田、左敷田というところに家が出来てきた。出津は野中、中組、下手、堤根の人達がいった。堤根は水田の村だったから出津に畑を求めて、野菜づくりをやっていた。中組が中心になって野菜づくりに励んでいた。デズゴーチ（出津耕地か）と呼ばれ、少し掘ると全部、砂。野菜の適地であった。もろこし、ごぼう、棉、大豆、小豆、枝豆などが作付けされていた。しだいに、小松菜、トマト、きゅうり、茄子が作られ越谷、草加、千住の市場に出していた。最近ではほうれん草、小松菜、トマト、きゅうりから一品経営になってきた。農地を空けとくことはなく、なんでも作付けしていた。

本家から分家として出た。「よくあんな土地に出たな」と言われたぐらいの場所だった。土手からこの土地はおおよそ55町歩。建物は神社以外になかった。土手の際には確か5軒から6軒あったが、あとはすべて畑、であった。このあたりには雉、鴨、よしきり、しらこぼと、ひばりなどあらゆる鳥がいた。川土手は一人が歩けるのがやっとで葎、篠竹があって、昼間でも一人で歩くのが厭だと思うぐらいのところであった。堤防のまわりのこんもりとした場所には狐、野うさぎ、イタチなどもいた。

この場所は元荒川の流水場であった。堤防が築かれその中の土地が耕作できるように、という考えがあった。洪水が起こると水をこの場所に貯めて、向こうで水害がないように貯水池的な役割を果たしていた。昭和20年代はすべて畑。堤防作りの折には、堤防の手前の畑の土をあげ

て盛っていった。だから堤防の周りは土がとられ、田んぼとなっていた。神社が真ん中にあるのはそうした理由である。堤防の外に土が溜まっているところがあって、その土地も貴重なので付けしていた。水が入るたびに土地の高さが上がっていった。昭和の初め、すでに耕作されており昭和30～40年近くまで耕作されていた。

2) その頃の川遊び・洪水

川で遊んだか？って。今頃から8月いっぱいまで子どもの水泳場所。水もきれい。元荒川の水源地は熊谷の先じゃないかな。荒川が雨とか降ると元荒川に落としていた。荒川の落とし堀になっていた。今の第六天にダムがあるが、大学から下流に行ったところにもダムがあり、全部用水だった。古利根川の水は逆川（さかさがわ）となると用水使って元荒川の下を通して東京のほうへ流していた。古利根川のダムは松伏にあって、そこでとめると、水が増えて逆川になった。

道のすぐ下が荻島村。幕末に河川が改修されたらしい。流れをまっすぐにしようとしたらしい。改修するとどうなった、というと、川の流れがよくなって下の者が困るからやらないよ、と言われたらしい。洪水は土地が低いから昔から多かったが、向こう（大袋）の堤防が弱いから、向こうばかり切れて、こっちは洪水少なかった。夜中まで見張りしたが向こうが切れたら手旗信号で伝えて、それから喜んで酒場に行っていた、ということを知ったことがある。

この辺の水は綾瀬っていう小さい堀に。満水になって土手が崩れてこっちは洪水になったのは明治の42、3年のことだった。『ご獵場』の反対側が切れたことある。朝日信用金庫の辺りが切れて、それは北越谷に流れて、だからそのあたりは砂が多いらしい。北越谷は2～3尺掘ると、粘土。昭和22、3年の洪水。杉戸のほうの江戸川あたりが切れたがその時も向こうが切れた。

川では6～8月まで遊んだ、水もきれいだった。魚は川の傍で生活していて、鯰、鰻が中心だった。何人かの人を船を造って投網とかやっていた。驚くほどは取れてなかった。竹に針をくっつけてみみずつけとくと、鰻や鯰（なまず）がかかっていた。鯉、鮎、ヨメッコ（腹の赤いの）というのがいた。ビンドー（ガラスでできたやつ）に小魚を炒ったのをに入れて、川に入れておくと2時間で相当魚が入っていた。串で食べたこともある。ドジョウも終戦後いたことあったけど、取ったことはない。鯰はてんぷらで。『新見世』や大戸の第六天の前『きわいや』はみんなこの辺で捕った魚で間に合ったらしい。『はしもと屋』ってところの俵が魚を買い上げていた。それほど生活を満たすようなことはない。小遣い稼ぎ。それをやっていた人はみんな戦争で亡くなった。流れと一緒に入ってくる魚を捕まえていた。

昔は船を持っている家があった。兄貴の嫁は、橋がないから大沢のほうとか遠回りをしていった。船で行くと半分くらいだった。船は通うのを楽しみにしていた。木の風呂に入れるとすぐ沸いた。風呂の水が川の水。子どもの着物洗っていた。洗濯の場。土手のわきの小さい小屋のあたりはそうだった。大学の前の浅瀬は子どもの水泳場所。おぼれることはなかった。安全だった。その当時、プールを作ることが考えられ、大袋小学校がはじめた。昭和30年ごろだった。子どもの水難事故を心配した校長が川に丸太入れて、父兄の監督をつけていた。だけど毎日来るのが大変だから昭和31年にプール作ろうという話となり、各部落、常会なんか協力お願いして昭和32年にできた。大袋小に。埼玉でも早いほう。川口、川越、熊谷あたりにいくつかあったのを見に行くと、周りに通り道を作ってもらって、ビニールを引いて水底にしたプールを作ろうとした。学校の中に。やっているうちにそんなに金かかるのでは本格的に作ろうとなった。東武沿

線では埼玉では大袋が第一号。川の中には杭を打って、そこに掴ませて遊んだ。大袋でも荻島でも水難はなかったがプールの時代になっていった。

以上が出津地区周辺の語りである。土手、洪水、川遊びなど元荒川の語りは、大きな出来事が強調されることはなかったが川が前景に存在していた時代の語りだと言えよう。

2 学生が捉える川のイメージ“私の川”と元荒川

表1をもとに、A(いわゆる都市部出身者)B(いわゆる地方出身者)の2群比較からまとめる。「入学以前の川一般のイメージ」では、「バーベキュー」がともに多い傾向にあるが、魚釣りや川利用に関しては、B群に「鮎採り」「雑魚採り」「岩魚採り」「芋煮会」「神輿祭り」等、具体性が顕著に示され生活と川の親和性が推察される。川の水のきれいさもややB群に高い。A群の「特になし」が多いことから、川と生活の親和性イメージの低さが示唆される。「入学後の元荒川イメージ」に関しては、両群とも圧倒的に川そのものの「汚さ」を指摘している。一方で文教大学のシンボルとして肯定的にも捉えており、特に桜並木の美しさが強調されている。「元荒川への期待・要望」に関しては、川とその周辺の汚染対策(ゴミ対策を含む)への要望が高い。そして、河川敷を含んだ地域交流の場としての期待度の強さが窺われる。これらの期待や要望は、文教大学生のアイデンティティ形成に関わる文化景観論上の重要な創出課題のひとつであると判断して良いであろう。

3 記憶の中の元荒川・地誌学的考現(図1)

1) 越谷の低地帯を作った河川の流路変遷概観

越谷は古利根川を主たる河川とする中川低地にあるが、低地帯を作った河川の流路変遷は単純ではない。縄文海進直後の利根川、荒川の両河川は現在の荒川の流路を流れていたが、古墳時代になると加須低地の沈降にともなって両河川は東流し中川低地内を流れるようになった(埼玉県1993)。利根川と荒川は複雑な河川争奪を繰り返したが、中世には荒川は現・元荒川筋を流れ、利根川は会の川から現古利根川筋を流れるようになった。中世の荒川は熊谷の川原明戸から南東流し、岩槻市長宮で春日部市小淵から西流してきた利根川(古隅田川)と合流し越ヶ谷を経て越谷市中島で小淵から分流した利根川をあわせていた。その後、利根川の主流は古隅田川を介さず現古利根川筋を流れるようになった。こうした過程の中で越谷の大地は利根川と荒川両河川の影響を受けて形成されていったのである。荒川は寛永六年(1629)、熊谷市石原で和田吉野川筋(現荒川流路)に付け替えられ、それまでの荒川は元荒川と称されるようになった。

2) 自然が残した川の記憶 — 河川地形

一般に、大きな河川の河道両脇には粗粒堆積物が堆積して自然堤防ができ、その後背には湛水によって泥が堆積し、後背湿地とよばれる低湿地帯ができる。自然堤防と後背湿地の高度差(比高)は通常0.5~2m程度あり、平坦な低地帯での2大地形となる。図1は明治13年に作成された迅速測図を元に堀口(1986)などを参考に作成した越谷の地形分類図である。越谷は西に大宮台地の支台が見られるが、大半は低地の中にある。そして低地は大局的には元荒川と古利根川の兩岸に自然堤防が配列し、その後背に後背湿地が分布するという形になっている。その中で平方、袋山、花田には、かつての古利根川、元荒川の旧河道の痕跡が見てとれ、自然堤防のところ

表1 文教大学生が記述する“私の川の記憶”と現在の元荒川とその周辺

n = 47 (教育・人間科学部学生から有意抽出) 全体

A 埼玉・千葉・神奈川・東京出身者群 (n = 25)	B 栃木・茨城・群馬・福島・北陸等出身者群 (n = 22)
<p>1 入学以前の川遊び全般</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マラソン大会／河川敷・遠足(2)・凧揚げ・石拾い ・虹鱒掴み・バーベキュー(7)・魚釣り(6) ・稚魚放流・川下り(4)・花火(2)・舟遊び(2) ・土手遊び・キャンプ・水泳(5)・石の水切り(3) ・石拾い(2)・川遊び(3)・花見・特になし(6) 	<ul style="list-style-type: none"> ・魚釣り(8)・川遊び・バーベキュー(5)・鮎採り(2) ・川遊び(2)・雑魚採り(4)・川底で怪我・探検(3) ・花火大会・稚魚放流・花火(2)・キャッチボール ・キャンプ・川遊び(5)・水泳・水質検査・ゴミ拾い ・茅煮会・船遊び・写生大会・神輿祭り・水草探し ・岩魚採り・特になし
<p>2 それらの川のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・解放感・夕陽・清らか・太陽の反射・おいしい食べ物・汚い(8)・生物・自然・きれい(5)・楽しい・人との交流・危険(3)・冷たい・水きれい(4) ・流れ早い(2)・水冷たい・いろんな生き物(5)・臭い ・干上がる・自然がいっぱい・穏やか・転びやすい ・河川敷・奥が深い・怖い・川下り・涼しい・楽しい ・浅瀬安全・海よりきれい・雨が降ると危険 ・特になし(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・水きれい(10)・流れ早い・深い所危険・汚い(3) ・虫が沢山・解放感・清々しい・癒される(2)・臭い ・メダカ・楽しい・ワクワクする・中々行けない ・少し特別・冒険・遊び場(4)・懐かしい・小学生 ・ゴミ多い・広く大きい・家族の思い出・練習場所 ・魚・沼きれい・下水上汚い・自然・山付近きれい ・近所汚い・遊びやすい・海よりきれい・急流危険 ・新発見の場・様々な生物・せせらぎ落ち着く ・特になし
<p>3 入学後の元荒川のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・BBQ・文教大生・桜(2)・春・入学式・卒業式 ・降雨水位増す(7)・桜きれい(3)・越谷で景色一番・魚みえない・紅葉・夕陽きれい(3)・汚い(17) ・鴨(2)・釣り人・雑草多い・活気がない・大きい ・意外に生物多い・出津橋からの景色好き・放置ゴミ(4)・浅い・鴨が沢山・和む・きれい(2)・さわやか ・美しい(2)・鳥・魚・亀・深そう(2)・本当に魚いるの・出津橋・鯉・橋少ない・土手の整備不足・土手遊び・BBQ・学校の自慢・元荒川＝出津橋 	<ul style="list-style-type: none"> ・汚い(12)・広い・きれいな桜並木(3) ・ゆったりとした時間・桜きれい・野鳥で和む ・市民の憩いの場・自然あふれる・野鳥多い・魚 ・段々きれいになっている・地域交流の場・季節の行事 ・手入れが良い・大学のシンボル・小さい・もっと清掃活動を・子どもが遊べる環境に・川で交流を ・放置ゴミ(3)・鴨かわいい・きれい・放射能汚染 ・夕陽きれい・沢山の鴨・雨と氾濫(3)・土手は好き ・なじむ・鳥が遊ぶ場
<p>4 元荒川への期待や要望</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと整備を・地域の交流の場に(2)・きれいに(9) ・釣りがしたい・色んなイベント(2)・放置ゴミ解決(3)・遊び場でなくする・増水対策・景観良く ・蛍が見たい・泳げるように・生物紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・きれいに(12)・ゴミ対策(4)・子ども遊べる環境(2)・野鳥もっと見たい・遊歩道広く・両岸の道広く ・釣りスペースを広く・河川敷の有効活用・土手整備 ・交流促進・街灯設置・全体の整備・放射能対策 ・魚類の放流・市民の協力・もっと有名に

すべて自由記述(複数回答)
BBQ=「バーベキュー」

() は回答人数、() なしは単一回答

どころには中川低地特有の地形である河畔砂丘が分布していることもわかる。

3) 河川地形と土地利用 — 上書きされていく河川地形

自然堤防は高台であり砂地である。一方、後背湿地は低湿地で泥地である。低地に住み着いた人々は自然堤防をすみかとし近くで畑を耕し、住居から離れた後背湿地を稲作の場として利用してきた。その様子は明治13年の迅速測図によく表れている。集落は自然堤防上に発達し、その集落を結ぶ街道もまた自然堤防に沿っている。そして、自然堤防には古くからの神社仏閣が建立されている。図1には迅速測図から読みとれる寺と神社の分布を示している。図より神社仏閣は見事なまでに自然堤防上にあることがわかる。後背湿地に分布するのは小さな稲荷だけである。

自然堤防上の河畔砂丘は低地の中では最も高台であるが、砂丘は洪水被害から免れるだけでなく、地震に強い良質な地盤である。このため、砂丘には地域で最も古い神社や寺が立地する。以上の土地利用のしかたは低地の土地利用としては妥当なもので合理的であるが、明治32年に東武伊勢崎線が開通してからは、交通の利便性や経済性が重視され、かつ治水技術の向上も相まって後背湿地にも住宅が建ち並ぶようになり、近年では旧河道にさえ住宅が建てられている。その結果、現在の地形図からはかつての河川地形を知ることは難しくなっている。かつての河川地形は人間によって上書きされてしまったのである。もっとも、本来人間は自然を改変していく存在である。越谷市花田や袋山の大きく屈曲した旧河道の出現は江戸時代の河川改修の結果である。瓦曾根には水利のための溜井が設けられていたが、寛永六年の荒川の付替えのため水量が激減したために、利根川から中島用水を松伏溜井に通し、さらに逆川を通して瓦曾根溜井に導いたのである。この工事の際、幕府は大きく屈曲して流れていた元荒川を天獄寺前から東福寺にかけて直流に改修し、さらに宝永三年（1706）に袋山で大きく曲流していた元荒川を直流させる改修を行ったのである。

4) 水神信仰と水運

水郷である越谷には水神信仰が残されている。久伊豆神社内には大杉神社の石祠があり、元荒川と中川の合流点には水神社が祀られている。越谷の水神信仰の特徴は弁財天が多いことで大房、南荻島、下間久里には弁財天石祠が残されている。また、元荒川は堰が多く舟運には不便で水運はあまり発達していなかった。しかしその中でも越谷には大橋際河岸、瓦曾根河岸などが近代まで存在していた。瓦曾根河岸では荷物の積み替えのため、河岸間屋が軒を連ねていた。元荒川の水運は明治後半の道路整備、鉄道の開通によって衰退してしまった（埼玉県教育委員会1991）。

Ⅲ 紡がれる元荒川・文化的価値の再発見

1 住民が紡ぐ物語

1) 『元荒川の自然を守る会』の語り

この土地に暮らしてきた人、最近になって暮らしはじめた人、この土地に出入りしていた人、離れたところで暮らしている人、川を巡っての関係は多様だ。この項では、新しい人たちの川・河川敷との関わりを川と人々との関係再編の事例として紹介する。以下は、『元荒川の自然を守る会』との討論の場における会の方々の語りをまとめたものである。

川が生活と無関係になってしまった。生活排水の場所としての川となってきた。1998年に公民館から誕生した団体で、出津橋地域の人達が10人程度で川の周囲のゴミ拾いの活動をはじめた。当初は。いまではメンバーが40名を越している。活動をはじめたころ、道路問題が浮上してきた。浦和野田バイパスが元荒川を縦断的に通り抜けていくという道路案件である。そのような案件と出会ったことで政治的課題と向き合うようになってしまった。

反対は唱えるものの、都市計画決定された道路建設に関わる課題だから、簡単じゃない。地下化など工法について署名・請願をする団体にもなっていった。バイパス道路問題というのは、道路が川にとってかわっていく事例で、かつて川がそうであったように、生活上、現代では道路が大切になってきたので、廃止や中止を叫ぶことが難しい。

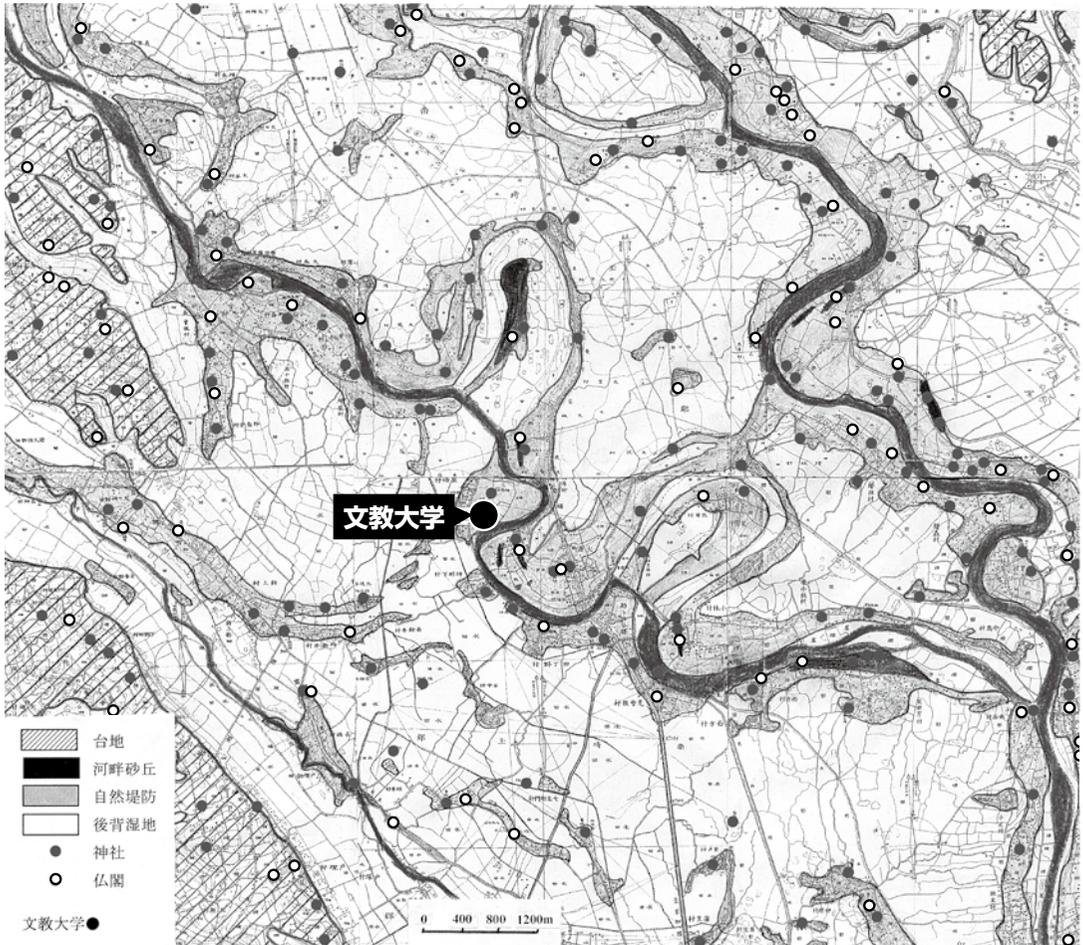


図1 越谷の地形分類図

道路の必要性は理解できるものの、河川敷があり、動植物があり、星がよく見えるところ、蛇行している出津周辺がもっとも空気がきれいなので、星がよく見える、そのような自然を守るために、土手や河川敷のゴミひろいなどを行ってきた。バイパス道路見直し（廃止、凍結など）という活動をしなが、この川をきれいなまま次世代に渡すことを考えてきた。

元荒川の自然を守る会は歴史が古いが近年は川をめぐる会や団体が急増している。そのなかで自然保護とバイパスは認められないという立場を維持しているので、どうしても政治的側面も有する会となっている。道路問題と関わることにより、行政との関係を持っているから、自然を守っていく活動面と政治的行政的な活動面、という二つの側面を持っている。

運動方針は河川敷がいかに素晴らしい場所なのかをアピールすること、生活の大事な一部として川や河川敷があることをアピールする。文教大学教育学部と連携して河川敷という場を大切に、そして《元荒川自然フェスタ》を開催してアピールしていく、すでに8回も開催してきている。自然観察、樹木調査を重ね、水と緑が大切ということが世界中の認識だから、このまま川をそっとしておいてもらいたい。絶対に道路も必要、同時に河川敷は素晴らしいよ。学生だってこの川から恩恵をうけている、生活手段ではなく、生きていく上で、大切。河川敷には動植物がい

る、この会は環境保全のサークルで、自然を守る会だ。ゴミ拾いを月に一度、二度実施、そうした活動後に道路計画が耳に入ってきた。バイパス整備反対、そのような看板告知もしたけれど、当時は文教大学もこの計画の詳細を知らない状態であり、大学も関わってもらうことが大切だと思った。環境優先、生活重視がスローガンの県政だったので運動をした。花見では多くの方々を訪れるので桜並木の喪失に対して署名活動をやった。メディアも取り上げてくれた。計画の受け入れと交換条件について学び、地下方式の道路建設工法、土手を守る方式での工法を学び、都市計画決定の重さも学んだ。建設工法のことであれば対応できるが計画決定を見直すことは難しく、ゆるやかな反対で時代背景、環境優先で見直してはいかがですか、と提案してきた。河川が蛇行しているが、この川は氾濫していない。ですが堤防が出来ると安心という川向こうの意見は道路が堤防となるので賛成、こっち側は反対。この自然景観を守りたい。保全していきたい、という考えがある。

堤防に植樹は違法だが、桜が見事になった。観光資源にもなり、桜並木が知られてきた。公園づくりが計画されるといいが、国道、県道の行政は役所の道路課の権限が強い。盛土方式もあるがシールド工法、地下方式も選択される可能性もある。河川敷が一つのシンボルなので、北越谷の文教大学前の桜並木は大切だと思い、守る方向でほぼそと活動をやっている、根っこは守りたい自然を守ることを、ウォーキングや近所は犬の散歩に適し、駅に近いところの大切な自然の環境を守ることをやっていきたい。こうした問いかけていかないと、いけない。この土手、この環境を好きな人をたくさんふやしていこう、ここっていいね、という認識、62キロの元荒川の流路なかで、この場所の蛇行が一番美しいと思っている。第三日曜日にゴミを拾い、「フェスタ」を一年かけて計画し、野草積み、自然観察を繰り返している。

2) 『元荒川の自然を守る会』の語りが示唆すること

元荒川の自然を守る会の活動は、河川敷に生い茂る植物、そしてそこに棲息する動物に眼を向け、さらには川のある光景について価値を見だし、新しく「元荒川を発見」する活動だと言える。発見された元荒川は、保全の対象となり、景観維持のためにゴミ拾いなど美化運動に発展している。また、そのことを通して、出津周辺に暮らす人々という新しいアイデンティティを獲得させている。また、文教大学との連携については強い期待があり、地域と大学の連携の可能性を示唆している。

同時に、この会はバイパス道路建設問題という課題も背負い込んでいる。都市計画決定という大きな枠組みのなかで、道路建設も賛否両論の渦が確認されている。この会の活動により元荒川の自然の価値が認知されていく一方で、その価値を喪失しかねない道路建設計画が控えている。渋滞解決、堤防補強、利便性の向上という声と元荒川の自然景観を残したいという声のなかで、現在も活動が続けられている。

2 再構成される元荒川・まとめに代えて

1) 住民が紡げない物語 — 生活臭のない河川からは、文化までもが見えてこないのか

河川は太古から飲み水、農業用水、水運などに利用され、文明・文化と密接な関係をもっていた。人々に恵をもたらす川は反面、洪水という名の下に命を奪ってもきた存在でもあり、少なくとも近代末まで川は畏怖の対象でもあった。が、堤防等の構築によって、洪水被害はコントロー

ルできると思ひ込み、恵は求めるものの、畏怖の感情は失せたかのようにになっている。

昨年、奇妙な報告に出合う。東日本大震災は様々な教訓を残したが、当埼玉県庁は地域防災計画のひとつとして「津波被害に関する想定」の検討作業を昨年末まとめ上げた。その内容は海のない埼玉県ではあるが、県内の大半を流れる荒川等への津波の溯上（逆流）対策だった。

ここでは川は無害化されることなく、背景化されることなく畏れの対象として生きている。少なくとも生活する住民に多大な影響を及ぼすと考えられる河川が将来も存在すると想像したことを、地方自治体が提出して見せたわけである。

さて、主題を元荒川に集約しよう。江戸寛政期「伊奈半左衛門殿と申せば百姓は勿論、町人に至る迄、神仏之様に敬ひ申し候」（寛政四子覚書）との記録が残っている。伊奈家は代々の関東郡代（惣代官）であり、とりわけ江戸開府より川普請を専らとする半職業集団を統率、治水の神様として関八州の百姓から崇められていた旗本であった（近隣に伊奈の名を冠せられた地が多いことから、知ることができる）。

この伊奈家の下で、荒川は本稿Ⅱにおける「背景化される川 — 記憶の中の元荒川」の中にも記したように、寛永六年（1629）に付け替え（西遷）されている。これは文禄二年（1594）から利根川の東遷に始まった関東各地の河川流路改修整理の一環で、切り離された熊谷以南は元荒川と呼ばれるようになり、沼沢で不毛の地とされた地域の新田開発が進められた（越ヶ谷領内では、出羽地区の新田開発は1,020石が2,049石に倍増）。

そして現在の元荒川は、17世紀のデザインされた流れが、ほぼ今の流れとなっていた。しかし、完全な治水は人間の技では不可能である。昭和30年ころまで越谷地区にも川の氾濫を見たのは、われわれの聴き取り調査でも確認されている。その時期まで屋根裏や軒先に避難用の小舟が用意されていたであろうが、現在の越谷地区では見られなくなっていた。

以降、洪水は起きなかったのであり、放水路でしかなかった元荒川は、用水としても川水の重要性を感じさせなくなったのではなからうか。川の無害化と川への無関心との一体化である。

今回の調査では、周辺住民と元荒川の関わりにおいて「紡ぎだせる話」は希薄だった。おそらく治水の水神さまを祀るために川沿いに建てられた越谷の神社の多くもまた、その役割を喪失させてしまったことが調査でうかがえ、元荒川と住民の伝統的関係は失われ、新しい関係の編成に向かっていくことになった。

2) 元荒川に限らない「新しい河川」の価値について

「川は、誰のものか？」などという公共を巡る議論が成り立ち始めた昨今である。ところが、八ツ場ダムの是非が論じられはじめると、とたんに利権の争奪となる笑止千万さを見せてしまったのは周知のとおりである。

近年、急速に山の存在が海の漁にまで大きな影響をもたらすことが知られてきた。つまり川は山と海を取り結ぶ流路であり、その本来の価値は計り知れないはずである。市民にとって、明快な利益や利潤をもたらせない河川は、価値がないとみなす傾向にあるようだ。

3) はじめたい河川の再構成・すなわちネットワーク的「つながり」の創出

本稿は、元荒川に限った中での“川と人間”という素朴なテーマから進めている。しかし、平成23年の元荒川から生活誌を紡ぎだすことは、その端緒の一部を見出すのみに留まった。今後

さらなる学術的に合理的な方法によって検討を練り上げる必要がある。

従来、河川とはその流域のみに限られて語られてきたと思われる。たとえば・大水で、洪水が迫る→・流域全村は、それぞれ決壊対策をとる→・堤防が決壊する（ある村のみが被災し、他の村々は無キズ）→・被害のなかった村々が酒盛りなどを行うことさえあった。

ひとつの河川の流域各地は水利慣行と呼ばれるように用水などで互いに村同士で提携があるものの、「水争い」という形容に示されるように一朝ことあれば憎しみ合うほどの関係となるものでもあった。その意味からも、近未来の河川を巡る思考は「川沿い」に暮らすということだけの共通項から脱し、「同病相哀れむ」という互恵的な側面を重視しつつ、まったく異なる河川同士での生活上の文化的連携を検討することが有効ではないかと考えている。今後、元荒川を中心とする継続的な河川学研究（仮称）を立ち上げ、従来においてはまったく独立した各々の「縦の流れ」でしかなかった河川を、あらゆる分野（工学から文化論まで）を投入し研究する「横の流れ」・地域間の関係性、としてその対象にする学際的な方向性が求められていると考える。

そのことこそ、河川文化の新たな再構成に向かわせる契機となるのではなかろうか。

菅（2006）は川を、そこに関わる住民にとって「共的世界」であると指摘し、国家や行政が管理する公的な存在や個人が担う私的な存在の中間に位置するものであると捉え、それを“川のcommons”と指摘している。

今後の元荒川が、近隣の市民・住民ならびに文教大学越谷校舎にとって、“commons”として存立し続けるためには、まずその強固で具体的な存在理由を特定しなければならない。

さらに、その先には、「自然保護活動」とともに「景観的な価値の再発見」等を含めた文化論的な討論とその継承が求められていると思われる。その考察と検討を次年度以降の第二報にゆずる。

【謝辞】

まず、聴き取り調査にご協力いただいた越谷市南荻島地区に古くからお住まいの5人のシニア層の方々ならびに『元荒川の自然を守る会』の方々には深謝する。さらに簡易アンケートにご回答頂いた文教大学越谷校舎の学生47人に感謝する。同様に聴き取り調査の補助や音声記録の文章化作業を手伝ってくれた4人の学生（久保田有香・中里元美・伊藤羽瑠佳・内千代子）に感謝する。なお、Ⅲ 紡がれる元荒川の1 住民が紡ぐ物語に関しては、文教大学教育学部・学部共通科目「基礎演習Ⅱ」の報告書4班の内容が大きなヒントとなっている。代表：柴崎朝仁（理科専修2年）君を含む、細金史貴・竹村翔太・内藤善文・立石距子の5人の学生に対し記して感謝する。

本報告は、生活科学研究所2011年度の研究プロジェクト2：『越谷の伝統と文化』の成果を中間報告としてまとめたものである。

註・文献・資料（引用順に記す）

小林勝法（2011）：「茅ヶ崎学」への取り組み—文教大学における「茅ヶ崎学事始め」の成果と展望—、2011 湘南フォーラム 文教大学湘南総合研究所紀要 pp.71-78

堀口萬吉（1986）：埼玉県地質図

埼玉県教育委員会（1991）：元荒川の水運

埼玉県（1993）：中川水系 総論・自然

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉（編）（2000）：越境する知2 語り；つむぎだす 東京大学出版会

菅 豊（2006）：川は誰のものか—人と環境の民俗学 吉川弘文館 pp.219-221